

ロバート・アーウィンと名乗る有名人は、不動産業者やインスタレーション藝術家など、何人かあるが、そのなかに中東学術の専門家(1946-)も居る。『夜と馬と沙漠』と題されたアラブ文学選(1999)を編んで高い評価を得たほか、『アルハンブラ』(2005)に至る学術書を始め、自ら英訳を企てた『アラビアン・ナイト』を振った『アラビアの悪夢』*Arabian Nightmare*、話題となった『優雅な死体』を含む、多くの小説も著している。同世代のなかでは最も多産とあってよい彼は、昨年『知を渴望して：東洋学者とその敵たち』という本を出版した。東洋学者とは *Orientalists* で、エドワード・W・サイードのあまりに著名な本『オリエンタリズム』(1978)が標的／仮想敵と目されていることは、題名にも歴然としている。アーウィンの話題の書物と、それを巡る書評を読み比べてみると、『オリエンタリズム』論争から30年を経過した、現在の知的状況が見えてくる。

サイードの著作は、幾多の事実誤認、扱う対象領域の偏りや欠落を残したまま、世界35ヶ国語に翻訳され、文芸批評の書物としては破格の成功を収めた。東洋学者たちを、政治的な領土的侵略の知的お先棒を担いだ御用学者として糾弾した本書は、絶大なる影響力を発揮し、その結果、従来を東洋学という学術的専門領域は、学問的信憑性を疑われ、中立を装った政治加担を断罪され、昔日の威信を喪失し衰退した、とさえいわれる。

これに対してアーウィンは、ムーア人のトリード占領以来千年に近い西洋のオリエント研究を400頁に圧縮し、サイードが除外したドイツの文献学者、ロシア皇帝お抱えの中東専門家、ハンガリーの亡命ユダヤ系学者らの数奇な運命にも目配りを怠らない。現存の著者でこの破天荒な大業を破綻

連載 94
「奇人」としての境界的知識人.. 知への渴望は、知識人の免罪符となるか

発刊後30年を前にして『オリエンタリズム』論争を再訪する

岡野 隆行

2007
05-19
N. 2821

国際日本文化研究センター研究員、
総合研究大学院大学教授
稲賀繁美

なく描き切る者など、アーウィン以外には見当たらない。たしかにアーウィンの描く東洋学者たちは、東方世界の研究に刻苦勉励はした。とはいえ、その深遠なる学識の多くは、19世紀中頃に至るまで、およそ実用的な政策目的には役立たない。例えばギョーム・ポステル。日本に神の国を幻視した彼は、異端審問に処されるが、無害な狂人として極刑を免れて幽閉された、ルネサンス期の神懸り東洋学者だった。アーウィンの物語に続々と登場するのは、ポステルの裔よろしき奇人・変人の群像だ。

大英帝国の官吏ウィリアム・ジョーンズは、たしかにサンسكريットとペルシヤ語の同族性を発見し、それが古代ギリシア語やドイツ語と同一の群をなすとの印欧語族仮説に導かれた。だがこの仮説がアラビア語を除外するための恣意的な操作であり、そこには帝国主義的な下心があったとするサイードの読解は、ほとんどポステル張りの狂気の沙汰ではないか。アタナシウス・キルヒャーはヘブライ語の動物名をカバラ的に読解すれば、その隠された本性が解明できると信じたが、ひょっとすると未来の読者は、サイードの著書に、このキルヒャーの再来を見て、それが20世紀後半には熱狂的に支持されたと知って驚くのではあるまいか。Philip Hensher (*The Spectator*, Jan. 29, 2007) の書評から、そんなサイード降ろしの論調を読み取ることも、あながち不可能ではあるまい。

これに対して、左翼を代表する陣営の論調は対照的だ。アラブ人たちが自らの文化について学術的記述を為すことは、西洋の東洋学者たちによって妨げられた。このサイードの決めつけを、アーウィンは見事なまでに反証を積み重ねて論破する。だがそのアーウィンとても無謬ではない。マッコレーにはインド滞在の

経験がなかったと述べてアーウィンの記述は間違いで、4年間のインド滞在であればこそ、現地であの悪名高き「インド教育に関する覚書」は執筆された。また後年には帝国主義への叛旗を鮮明にしたルイ・マシニョンだが、彼がサイクス・ピコ協約の草稿作成に関与した事実は否定できまい。果たしてこうした政治的関与は、アーウィンが主張するように、例外的な錯誤、純粋な学術的探究からの逸脱として片付けてよいのだろうか。そうM・ヤサノフは問う。

思えば、そもそも奇人・変人ばかりが登場するのは、彼らに「他者性」への相性があつたからではないだろうか。神と自らとを同一視して殉教したハッラージへのマシニョンの強迫観念も、そうした異端の系譜のなかで再解釈できるのではあるまいか。そして境界に立つ「奇人」たる知識人の責任とは何なのだろうか？

サイードの知的遺産の後継者を任ずるヤサノフから見れば、サイードの他者性をめぐる議論が、いまや「雑種の同一」性 hybrid identity や、「覇権なき支配」 dominance without hegemony へと発展を遂げたことを見逃すことはできない。『オリエンタリズム』がもはや時代遅れになったことこそ、その衝撃の大きさを論証している。そして例えばスーフィー養成機関として著名だった、モロッコのタメグルートに観光して図書館の手稿を拝見することは、ごく普通の米国市民には可能だろう。だがこの図書館の守衛には、外国旅行はおろか、そもそも米国入国ヴィサを取得することも、簡単には叶うまい。こうした現実を前にすれば、純粋な学術と政治的知識の区別がいかに虚偽に満ちているかは、明らかだろう。学者の学識がいかなる特権の代価であるかを意識させた意義は、これを『オリエンタリズム』に帰するべき

だろう (Maya Jasanoff, *London Review of Books*, June 8, 2006)。

こうして議論は、サイードのイデオロギー的論敵だったバーナード・ルイスの評定へと差し戻される。ルイスがユダヤ人だ、というだけの理由でその学識を失権させるのは、預言者ムハンマドの生涯に関する事実解明が教義に反するというので、これを検閲するのと同様の蛮行だ、とヘンシャーは訴える。これに対して、ルイスが米国とイスラエルの国家戦略政策顧問だったことが明らかとなった今日、『オリエンタリズム』がまったくの虚偽だったと言ひ張るのは些か無理ではあるまいか、とB・ロジャーソンは反論する。(Barnaby Rogerson, *The Independence*, 14 Feb. 2007)

そのロジャーソンは、こう疑問を投げかける。たしかにアーウィンは、サイードとの局地的戦闘には勝利を収めた。しかし果たして戦略的戦争に勝つたと言えるのだろうか、と。無私な研究に没頭した多くの東洋学者たちに、政治家たちと結託してオリエント世界を寡奪しようとするがとき共謀の意図のあったことまでは立証できまい。だが彼らの容疑を晴らしたとしても、それで問題が解決するわけではない。その彼らを時に利用して、世論の潮流を導いた言論人や政治家たち、小説家や画家から映画作家たちの罪状には、どう決着を付けたものか。それには次の著書『オリエンタリズムの藝術』で答える、とアーウィンは予告している。だがこの企画は、前作より上り坂の、難儀な登攀を著者に要求することとなるだろう。

*Robert Irwin, *For Lust of Knowing: The Orientalists and Their Enemies*, Allen Lane, Penguin Books, 2006, 410pp. 25GBP, ISBN0-7139-9415-0 予告された次著は *The Art of Orientalism*.